



長見有方(おさみ・ありかた) ステップス初個展である。長見は1947年生まれ、1969年に東京総合写真専門学校卒業後、スポーツ関係の出版社写真部に勤務。2007年退社。写真集『銀の鬨り』(私家版)他出版。主な個展は1970年「ヒロシマ・残照」(銀座ニコンサロン)、1994年「上海」(巷房)、2002年「ベトナムから遠く離れて」(巷房)、2007年「日本の聖域」(ニューモーメントアイデアギャラリー/ベオグラード)、2008年「巴里 パサージュ」(コダックフォトサロン)など。オーナーの吉岡と巷房で知り合う。ステップスとセルビアの繋がりもまた、長見の力であったと吉岡が教えてくれた。

長見は今回、ゴア、マラッカ、マカオの三都市の写真68枚を展示した。吉岡は自身のブログで註釈する。「いずれも旧ポルトガル領で、現在は観光で有名で、長見さんはその繁華街を撮っているのだが、人影がまったく見当たらないのだ。人物は「邪魔」であると彼は言う。(中略)人が居ない早朝を狙って彼はシャッターを切る。」

人がいない写真といえば、シュルレアリストのA・ブルトンが評価したボワフェールとアジェを思い起こすが、廃墟という虚構感によって人間を引き出す二者と長見は厳密に区別される。長見の写真には街のざわめき、活気、呼吸が映し出されている。写真とは撮影者の眼差しでもあるのだが、長見が見つめる対象は、とても旅人が興味本位で注げる場所ではない。旅に慣れ、人間を深く洞察している証拠であろう。絶妙な雰囲気を感じ出している。また、長見は写真を「結果」として捉えていない。そのため、映像以上の現実感と既視感に満ち溢れている。

人が写っている写真もある。今回の展示の最大の特徴は、写真を額に入れず、見る者も写真に映りこむ事にある。映りこむ見る者は写真の表面というよりもその内部に入り込み、写真の内部から外側にいる自己を眺めているように錯覚する。場所と時間を乗り越えることが可能になる。

